

# 道路網とオスティアの領域 ：最近の考古学的調査と地誌学的位置づけ

ミケーレ・ラッディ

(写真1) ローマ共和政期以来、法的に都市オスティアの統治管轄下にあった領域は、特に広大とは言えませんでした。その境界は、南西の方向には海岸線によって線が引かれていました。そこには、クラウディウス帝とトラヤヌス帝によって築かれた港が含まれます。実際この地帯の管理が極めて重要だったことを、頭のなかに入れておいて下さい。地中海全域から来た商品は、この地帯で積み替えが行われ、テーヴェレ川を遡航して、ローマの河岸にあるエンポリウム（交易所）まで運ばれたのです。（さて、オスティア領域の）東南東側の境界線は、リングワ運河、つまり沼から海に延びる排水路に対応して走っていました。これより彼方は、紀元後284年の碑文（*CIL* XIV 126）が教えてくれるように「アゲル・ラウレンティーヌス（ラーウィーニウム人の土地）」が広がっていました。最後に（オスティア領域の）北東の境界は、「フォッソ・ディ・マラフェーデ（マラフェーデ溝）」に対応していたにちがいありません。その理由として、この水の流れが、地域の連続した景観を区切る役割を果たしていたこと、またこの先から（彼方に）はオスティアに関係する内容の碑文が発見されていないことなどが挙げられます。

「モンティ・ディ・サン・パオロ（サン・パオロの山）」と呼ばれる丘の存在で特徴づけられる中部地域（訳注：現在のリド線アチリア駅の北）はオスティアの領域でした。ここでは、オスティア入植者の公有地（アゲル・プーブリクス）を示す境界石が見つかっています。

古拙期（アーケイック期）以来、ローマが建設される以前から、テーヴェレ河口周辺の一帯は海岸の潟によって供給される塩田地域となっており、後背地と二本の道によって結ばれていました。一つは「ウィア・カンパーナ（カンプスの道）」。これはテーヴェレの右岸に沿って走っていた道で、名前は「カンプス・サリーナエ

（塩田の野）」に由来します。もう一つは「ウィア・サラリア（塩の道）」で、この道はテーヴェレの左岸に沿って進み、ローマの北に位置するサビニ人の領域に至りました。伝承（フェストゥス）によると、塩の道の南の部分は、「ウィア・オスティエーンシス（オスティア街道）」と一致し、テーヴェレ河口近くの左岸で取れた塩を調達するため、古代のサビニ人がここを往来しました。

古代の旅程図のおかげで私たちは、オスティア街道の全長は、道程が 16マイル

（23.6キロ）（訳注：1ローマ・マイルは、約1.5キロ）だったことを知っています（写真2）。その道程は、非常に古い始まりから、オスティアの都市の発展と交易上の重要性の増大にともなって、直線道の方式に従い形を整えていきました。ともあれ、テーヴェレの河口からローマに至る地帯は、全体を通して「ウィア・ポルトゥエーンシス（ポルトゥスの道）」とカンプスの道の利用も可能でした。さらにテーヴェレ（自体）が、水の道として小舟により利用されていました。これらの小舟は、テーヴェレを進み、ローマの「フォルム・ボアーリウム（牛の市の広場）」（訳注：「真実の口」で有名なサンタ・マリア・イン・コスメディン教会のあたり）まで至りました。オスティアの領域でもこのあたり（訳注：現在のアチリアのあたりを念頭に置いていると思われる）は、土地が丘陵を形成し、湧き水や水路が豊富なため、共和政期から紀元後2世紀全体を通して、農地としての利用が進みました。

（写真3）しかしながら「アゲル・オスティエーンシス（オスティアの土地）」は、面積から言えば狭かったにもかかわらず、領域がローマの近くにあり、皇帝によって築かれた二つの港と都市オスティア自体を含んでいたため、著しい重要性を帯びることになりました。そのためオスティアの領域には、大部分のローマ都市の領域のように、広大な所有地に農場施設が散在するといった光景は見られませんでした。むしろ、大きくはない耕作区画に分割された、大きな干拓農地地区のような様相を呈していたのです。そしてこれらの耕作区画で農業を営んでいたのは、首都の最も重要な貴族層の家系で、彼らは都市ローマから遠くない場所にある所有地の経営から、まさに利益を引き出すことが出来たのです。そうした点に関して碑文は、シ

リウス氏、クリトニウス氏、キケロが属するトゥリウス氏、アキリウス氏、恐らくゴルディアヌス 3 世（位 238 ~44）の家族などの名を語っています。

しかしオスティアの領域は大都市の郊外のような性格も併せ持ち、この性格は特に際立っていました。大路や小路の密な道路網、水道、貯水槽、テーヴェレに築かれた施設（突堤、見張りやぐら、停泊所など）からなる数多くのインフラが備わっており、それらは、（直接・間接的に）首都が必要とする用務を果たすために造られたのです。

上で描写したオスティアの領域にアクセントをつけていたのが、オスティア街道です。これはローマの共和政期の市壁（訳注：いわゆる「セルウィウスの市壁」。現在ではほとんどが失われたが、テルミニ駅の正面玄関から出て右手と、アヴェンティーノの丘のアルバニア広場付近で一部を見ることができる）から始まり（写真 4）、9 マイル（訳注：13 キロ半ほど）あたりでフォッソ・ディ・マラフェーデに架かる橋（三つのアーチ状の橋桁を持つ）（写真 5-6-7-8-9）を渡ってオスティアの領域に入りました。この（オスティアの領域に入って）最初の区間は、最近の発掘で存在が知られるようになった共和政中期（紀元前 4-2 世紀）の小さな農場施設、さらにもっと広い農民の所有地、そして道の両側には帝政期のいくつかのヴィラ（例えば、セウエールス朝の時代にローマ市の都市長官だった元老院議員ファビウス・キロの有名な別荘。そしてさらに一枚の碑文は、貴族の家系であるアキリウス・グラブリオー族を記憶に留めています）が、途切れることなく続き、あるいはインフェルメリア地区（訳注：アチリア駅から見て南東の方向で、ヴィア・クリストフォロ・コロンボ（クリストフォロ・コロンボ通り）の北のあたり）には、農作業所と住居を兼ねた複合施設もありました。この複合施設には、オスティアで「テルメ・デル・ネットゥーノ（海神ネプトゥーヌスの公共浴場）」のモザイクを施工した、まさにその職人の作と考えられるモザイク装飾が残っています。ゴルディアヌス 3 世（紀元後 244 年に死亡）の父のものでされている有名なザルコファゴ（石棺）（ローマ国立博物館所蔵）が出土したのもアチリアの一带ですが、どの地域かは知られていません。

新しい遺跡群が、現在の国道8号線（訳注：ヴィア・デル・マーレ（海の道）とも呼ばれる）の両側で街灯用電線の地下埋設工事の最中に姿を現しましたが（ローマから15.8キロの地点）、その調査は、考古学監督所の意向とは無関係の理由で（訳注：資金不足が主な理由だったという）中断されました。発掘で掘りおこすことができたのは、帝政末期の墓地、地域の重要なヴィラへ水を供給するのに使われた水道（紀元後1世紀）の一部、幅約4.5メートルの舗装された道が20メートルほどの区間（恐らくオスティア街道の一部）です。多数の石をモルタルで固めた構造物も出土しましたが、1939年に発見された幾つかの美しく細工されている大理石のブロックは、この構造物の一部かもしれません。

**(写真10)** 現在の国道の17キロメートル地点あたり（11マイルに相当）で地面は陥没し、深く小さな谷ができています。ここに道を通すために、11のアーチ状の橋桁で支えられ、扶壁で補強された陸橋が架けられました。この陸橋はニッピの時代（訳注：19世紀前半）にはまだ見ることができましたが、現在では凝灰岩の方石を積み上げたアーチが一つ残るだけで、それすら今は見ることはできません。これはラドロネ橋あるいはリフォルタ橋（写真）と呼ばれる橋で、1912年から14年に道路の水平面を嵩上げするために埋め立てられ、その後、ヴィア・デル・マーレ（国道8号線）が敷設された際に完全に覆われてしまいました。

ヴァチカン博物館が所蔵し、紀元前2世紀の初頭に年代を推定しうるマイル・ストーンが出土したのは、恐らくこの辺りです。

このあたりで街道（訳注：stradaという言葉を用いているが、過去形で表現しているので、オスティア街道を指すと思われる）は、オスティアの水道橋（帝政初期）に沿って走っていました**(写真11)**。この水道は海岸の都市オスティアに水を供給するもので、煉瓦でできた橋脚の一部が前世紀（訳注：19世紀）の80年代に発見さ

れました。しかしこの水道は、特に 16世紀から 19世紀までの歴史地図（ Eufrosino della Voppaia 1547; Amati 1693; Cingolani 1704; Nicolai 1803 ）の中で描かれています。

水道は、都市オスティアの必要に応えるほか、少し前に話題にした農場施設にも水を供給していました。実際、最近の発掘で、マラフェーデ溝とテーヴェレの流れに挟まれた地域で、様々な仕上げの、また異なった時代に遡る水道管が何本か出土しています。

1984年のことですが、カサル・ベルノッキ（訳注：リド線の南側、アチリア駅から東に1キロ足らずのところ）の近くで緊急の発掘を行っていたところ、ローマ時代の駅舎とおぼしき跡の付近でオスティア街道の一部が見つかりました。見つかったのは60メートルほどで、保存状態は良好でした。その幅（両側の端から端まで 4.5メートル）は興味深いことに、コンスルによって敷設された車の通れる公道に典型的な幅15ペース（訳注：1ペース（フート）は約30センチ）に一致します。

オスティアの領域の奥（11マイルと12マイルの間）にあるドラゴンチェッロ（訳注：アチリア駅の北、モンティ・ディ・サン・パオロの南）の近くのモンテ・クニーヨと呼ばれる小高い丘に、古いラテン人の聚落フィカーナが聳えていました。

フェストゥス（訳注：紀元後2世紀の学者。彼の『言葉の意味について』は、アウグストゥスの時代の古代学者ウェッリウス・フラックスが著した同名の書物を縮約したもの）はこの聚落を、オスティア街道沿いの11マイルの標識がある地点に置いています。この町（前8世紀に成立）は、先だって存在した聚落（10世紀）の跡に作られ、テーヴェレおよび海に向かう交通路を支配する有利な位置を占めていました。伝承は、この町の破壊をローマ4代目の王アングス・マルキウスに帰し、その後、彼はテーヴェレの河口にオスティアを建設した、と伝えますが、考古学資料は、この聚落がその後の時代も繁栄し、前3世紀まで続いたことを証明しています。

## (写真12)

オスティア街道の両側、この街道とテーヴェレの岸のあいだ、ドラゴーナ＝ドラゴンチェッロ地域、そしてマラフェーデ溝の地区（溝の左岸）では、一連のヴィラ・ルスティカと農場施設の跡が出土しています。これらは、最初のカストルムの建設（紀元前4世紀末）のあと直ちに始まった農耕を目的とするシステムティックな領域占拠の一部をなしていました。発掘調査が明らかにしたところによると、これらの居住施設はポエニ戦争の時代に由来する農業危機の結果、前2世紀のあいだに放棄されました。この田園部が以前よりも大規模で、田園地帯における農業経営のためより整備されたヴィラ・ルスティカによって再び占められたのは、紀元前1世紀になってからのことです。ヴィラ・ルスティカは、大部分がギリシア・オリエント出身の解放奴隷によって経営され、居住施設は幾つもの小道や、マラフェーデの丘陵から引き込まれた水を配分するための施設によって支えられていました。マラフェーデの丘陵は、オスティアの水道や、他のもっと小さな水道に水を供給していましたが、これらの水道の跡が、幾つかの水槽と共に、この地域で発見されています。紀元後3世紀にローマを襲った経済危機の結果、オスティアの田園部は次第に人口が減り、活動を続けるヴィラ・ルスティカは、ほんの僅かとなりました。

## (写真13) オスティア街道から頑丈な陸橋を走る重要な部分が、11マイルと12マイル

のあいだのアチリアで、丘の傾斜に沿って見つかりました。道は両側の側面を地元で取れた凝灰岩のブロックで固められ、この側壁には、辺りの地層からしみ出る水が流れるよう幾つかの排水溝が開けられていました。橋は現在およそ300メートルほどが確かめられていますが、その目的は、街道を一定の高さに保ち、また内部の扶壁によって、石畳の下の軟弱な地盤を固めることにありました。橋の年代は、前3世紀末と前2世紀初頭のあいだに置かれています。これはちょうどローマ人がポエニ戦争を機に、オスティアの港とあいだを安全で迅速に結ぶ必要に気づいた時期です。

陸橋の両側面には、これを背にして墓碑や様々なタイプの墓が置かれていました。これらは、大部分が紀元前1世紀の終わりから紀元後2世紀のものと考えられます。発見された碑文から、埋葬された人々はほとんどが、高貴な家系に所有された近くの地所で働く解放奴隷だったと推測することができます。

1927年に、国道8号線（ヴィア・デル・マーレ）の敷設工事中に、オスティア・アンティーカの沼の近く（現在の道路の22-23キロ地点）でもう一つ陸橋が見つかりました。沼沢地が続いていたため、敷石は積み重なった三つの層から成る下地の上に張られていました。これらの下地の層は、カシの木の幹を打ち込んだ杭、凝灰岩の破片からなる路盤、そして川の砂利の敷石から出来ていました。他方、陸橋の両側面は、土地の陥没を防ぐために、扶壁のある壁構造によって強化されていました。

オスティア街道は、今日のオスティア・アンティーカの近くでは、現在の「ヴィア・ディ・ロマニョーリ（ロマニョーリ通り）」の道筋と一致していました。ロマニョーリ通りの下からは、様々な機会に敷石の跡が見つかっています。

オスティア街道の最後の1マイルはテーヴェレの流れに沿っていました。古代のテーヴェレはこの地点で湾曲していたのですが、その後1557年の有名な氾濫の結果、川の流れが変わり、この湾曲は消えてしまいました。道は、町（オスティア）の入り口（写真14）に至るまで、両側を墓地群に挟まれていました。これは「ポルタ・ロマーナのネクロポリ」と呼ばれ、前2世紀から帝政末期までの墓を含んでいました。

この短い検討を締めくくるにあたり、テーヴェレもまたコミュニケーションの手段と考えられていたこと、特に重い商品の運搬には不可欠だったこと（これらは、左岸づたいに牛に引かせた小舟で運ばれました）を強調しておきます。川は一種の道と言うことができ、最近の考古学調査は、ここで重要な家系に属する墓碑さえ発掘しました。最近右岸で出土した前1世紀の墓碑がその例です（写真15-16-16）、

考古学監督所が行った考古学調査の最中に、帝政期に商品を船から降ろすため用いられたいくつかの埠頭の跡が確認されました。(写真 18-19-20) (訳注：この報告で論じられているアチリア近郊やオスティア街道の発掘の多くは、オスティア考古学監督所のアンジェロ・ペレグリーニ所長によって行われた)

(毛利晶翻訳)